

私の本棚

向山陽子

ブラッと入った本屋で、引きつけられるように、買わずにはいられなくなる本に巡りあえた時、とても得をした気分になって帰路につく。お財布の軽さに、次のお給料日までの日数を指折り数えるはめにはなるのだが――。

「まんげつのよるまでまちなさい」

マーガレット・ワイズ・ブラウン作

ガース・ウィリアムズ 絵

松岡享子 訳

ペンギン社

八〇〇円

頁をめくるたびに、あったかいおかあさんと、かわいいぼうやの、あらいくま親子の日常生活が、幸せいっぱい伝わってきます。

でもぼうやは、その幸せな大きな栗の木の根元にある住みごこちのよい家から外へ出て、夜をみたくなるのです。しかし、おかあさんは「今はだめ、満月になるまで待ちなさい。」

ぼうやの夜への想いはふくらんでいきます。でもおかあさんは、そのたびに、やさしく自信をもって「満月の夜まで待ちなさい。」と、うたを唄い、抱いてくれます。

待つて待つて待ちきれなくなって、もうこれ以上待てなくなつた時、「ぼうやは、大きくなってあったかいおかあさんを見上げて、きっぱりといいました。

『いいかい かあさん。ぼく、これから、森へ夜をみにいくからね。いいでしょ？』すると、かあさんはこたえました。

『もしお前が 森へでかけて行って、夜を見たい

なら、(中略) さあ、いっといて、だって今夜は

——満月の夜だもの！』

このきっぱりと宣言する ぼうやの成長した姿。

そして、子どもの成長を見届けて、一人で夜へ出す

ことのできるきっぱりとした母親の姿。この時が何

と、満月の夜だったのです。

「時が満ちる」「内なる時 外なる時」「親(教師)

と子」「……ジーンとにじんだ涙をふきました。この

あらゆるまのおかあさんのようになりたいと思うの

です。

「かみさまへのてがみ」(Children's Letter's

to God)

「かみさまへのてがみもつと」(More)

エリック・マーシャル &

スチュアート・ハンブル 編 各六八〇円

谷川俊太郎 訳

葉 祥明 絵 サンリオ

私、おちこんだ時、開きます。活字嫌悪症になつた時、見ます。純なものにふれたくなつた時、読みます。

そして泣ける位、笑います。心にグサツとききます。励まされます。

アメリカ合衆国の子どもの達の「かみさま」への手紙を集めたもので、彼らの手描きの筆蹟が、つづりや文法の誤ちもそのままに生かされています。(誤ちをみつけると、浅はかにも嬉しくなります。)

「かみさま」への率直な、賛美、質問、願い事、そして、注文、時には知恵を分けてあげています。

のびやかな素朴な、忘れかけていた心にふれて幸せになります。

「人間のさまざまな経験の中でも、無邪気さと、子ども時代のおどろきに対する郷愁ほど長つづきするものはありません。」(编者)

「おとなになるといふことは、自分の中の子ども

を捨て去ることではなく、むしろそれをつきつめてゆくことなのではないか。」(訳者)

「ニホンザルの生態——豪雪の白山の野生を問

う——」

伊沢紘生 著 どうぶつ社 一八〇〇円

筆者は、日本モンキーセンター研究員を経て、現在、宮城教育大学助教授。

自ら、冬の下北半島の山中に入り、野生の猿と生活を共にしながら、その行動を観察し、遊動生活をする野生のサルの、本来の生きようを見ようとしている。

今まで一般にいわれてきたこと——「役割分担」やボスを頂点とする「主従関係」のはっきりとした「序列社会」。又コドモ時代の仲間同志のあそびが、将来、サル社会で生活するための基本的なことなど——は、野生のサルの生活には見られないことであ

り、むしろ不自然に「餌づけ」されたサルの「ひずみ」であることを指摘している。

さらに筆者は、餌づけされたサルに関して①野生のサルより小振りなこと、②オトナのメスザルの尻が汚ないことを掲げて、いずれも「餌づけ」という人間の干渉と無関係ではないと、心を傷めている。

私はこの一冊との出会いで、今までの人間の子どもの社会に関する、固定観念を根本から揺がされた。

私が、毎日、接している子ども達は、本来、野生のサルであるべきだったのに、餌づけされてしまった姿ではないか？ そのひずみは？ 我々の「社会」への固定観念から見直す必要はないのか？

筆者のフィールド・ワーカーとしての姿勢と行動は、実践者としての私に、多くのものを与えると同時に、多くの反省を迫ってくる。(大和郷幼稚園)